

本を読むことの意味 — 読書の単元からの考察 —

高橋 由美

1. 問題設定

95年度に国語Ⅰを担当した家政科の生徒たちは、授業の中で様々な形の「書く」ことを課すうちに、「書く」ことにはあまり抵抗がなくなり、次第に自分を出しはじめた。

生徒たちは、「書く」という方法によって自分を開く手段を得、感じたことや考えたことを言葉にしようとするようになったと思われたが、一方、「読む」授業となると活気がなく、少しでも長いものになると見ただけで嫌悪の表情を示す。それならば、次には「読む」ことによって新しいものや異質なものと出会い、自分を広げることではできないだろうか。さらに、読書体験が少ないというクラスの傾向を考えたとき、読む対象は「本」にしたいと思った。このような意識から、読書の単元に取り組んだ。

ところで、従来の読書指導は、国語科や学校図書館の立場から、または両方が連携して行われているが、その内容は、推薦図書や必読図書の案内、読書会や読書感想文などの指導が中心であるように思われる。つまり、いかにして本を読ませるかという問題と、その事後処理の問題とであ

る。調査や分析にしても、読書環境や読書量、読書傾向などについて全体の傾向を論じることが中心であり、個に注目したものは少ない。そこで、本稿では、「本を読むこと」に関して生徒の中にあるものは何で、単元を通してどのように変化したのか、さらにその課題について生徒の内面に注目した分析を試みる。

このクラスの生徒たちとは、授業を離れて話すことも多く、手紙をもらうことも度々あった。授業が終わった後に、言いたくても言えなかったことや言い足りなかったことなどを話しに來たり、手紙にして渡してくれる生徒たちもいた。このことから本稿では、分析の対象として、作文や単元の中のレポート、学習プリントなどの他に、生徒との会話や生徒からの手紙も用いることを提案したい。

2. 単元の実際

〈あなたにこの本を—読書レポートの制作—〉

1. 単元の概略

夏休みに学校として読書感想文を課さないこともあり、

この単元を構想したが、一冊の本を読み通したことを形にして残したいと考え、レポートを課すことにした。読書感想文のような筋の通った長いものは苦手だろうが、書くことが苦にならなくなった生徒たちである。本を読んで、心の中に浮かんできたことや考えたことをとらえ、自分のことばで表現することも目指したいと思った。

指定する本は物語を中心にし、私がつけている本を貸し出すことにした。ストーリーを追う楽しさを体験して欲しかったこと、私の本であれば、それについて生徒と話ができると考えたことによる(資料1)。

2. ねらい

① 指定された一冊の本を読み通す。

② 本を読んで心に浮かんだことをとらえ、自分のことばで表現する。

③ レイアウトなどを工夫し、レポートを美しくまとめる。

3. 実施時期 95・7・17(9) 4 時間扱い

4. 単元の流れ

I 本の配布、レポートの書き方の説明。(1時間)

—— 夏休みに本を読み、レポートを書く ——

II レポートの仕上げ。(2時間)

(完成していない生徒も多かったので、アドバイスしながら完成させた。)

III レポート集の製本、友人の作品を読む。(1時間)

No. 1
'95. 7. 17(月)

〈資料 1〉

“あなたにこの本を” ～ 夏休みに読書を～

夏休みから読書→読書感想文というわけではありませんが、やはり、長い夏休み、一冊読んだ“という本をついてほしいと思います。そこで、あなたにはこの一冊という本を送ることに。ぜひ、読んでみてほしいと思います。面白かったらぜひ感想文を書いてほしいです。

1. M. I. さん	“大森の森の家。(コウノボスワルグ)	18 S. N. さん	“花撮の人。(吉吉佐和子)
2. M. U. さん	“少年。(ビートたけし)	19 Ma. N. さん	“日本一短い国の手紙。(福岡北門町)
3. Ri. O. さん	“水点。(三浦綾子)	20 A. N. さん	“かきくなくやさい花火。(菅野直弘)
4. Ru. O. さん	“春の序。(宮本輝)	21 M. N. さん	“無物語。(鎌倉誠)
5. M. O. さん	“それから。(夏目漱石)	22 M. H. さん	“故郷後の音符。(山田 隆美)
6. A. K. さん	“アソビ舟を漂いに行こう。(千川あかね)	23 Y. H. さん	“シバルトさま さん(石原由美)
7. T. K. さん	“瑠璃。(宮本輝)	24 C. H. さん	“野火。(大岡 昇平)
8. M. K. さん	“トウエいの森の上下。(村上春樹)	25 A. H. さん	“星の子とま。(サン・テグジュペリ)
9. Y. K. さん	“父の靴ひ状。(向田 邦子)	26 K. H. さん	“栗林の目。(鷗外 泉)
10. Y. Ki. さん	“風の(の)ウラ。(佐 万智)	27 Y. H. さん	“アネの日記。(アネ・ワグネル)
11. S. K. さん	“TUGUHI。(吉本(は)公女)	28 M. F. さん	“ちひや。平和の国(高野 弘)
12. M. S. さん	“時の止る赤い靴。(菅野綾子)	29 A. F. さん	“遠い海から来た COO。(栗山 民夫)
13. M. S. さん	“知恵花のアン。(モンテリ)	30 E. M. さん	“音は歌える。(宮本輝)
14. M. S. さん	“白河花輪。(吉本(は)公女)	31 K. M. さん	“遠さのちがひ時計。(星野富弘)
15. A. T. さん	“紫きわのトクレン。(黒柳徹子)	32 M. M. さん	“二十四の瞳。(壺井 栄)
16. M. T. さん	“砂の城。(遠藤 周作)	33 E. Y. さん	“アソビの象。(モンテリ)
17. Ri. T. さん	“太陽の子。(辰谷 健次郎)	34 M. Y. さん	“神の語り手。(菅野綾子)
		35 Y. W. さん	“沈黙。(遠藤 周作)

〈読みたい本を探す—図書購入計画づくり〉

1. 単元の概略

「あなたにこの本を」実施し、生徒と本について話す中で、「どんな本を読んだらいいかわからない」「本の探し方がわからない」という生徒も多いことがわかってきた。また、図書係の先生との話から、図書購入の費用が余っていることを知った。そこで、図書室に購入して欲しい本を選ぶという目的で、本の探し方を学ぶ単元を計画した。生徒もよく目にする雑誌の中の本の紹介ページ、本の雑誌、新聞の広告、出版社の図書目録、国語便覧などを資料として示し、それらを見ながら、手に取ってみたい本、読んでみたい本を学習プリントに記入させ、購入希望の本をそれぞれ一冊選ばせた。また、本を注文することを想定した時、その本の著者、出版社、値段も必要な要素となる。そこで、「本を注文する際にはどうすればよいのか」についての学習にもなるよう単元を計画した(資料2)。

2. ねらい

- ① 本を探するための資料にはどんなものがあるのかを知る。
 - ② 本を探するための資料を楽しみながら読み、見てみたいと思える本に出会う。
 - ③ 本を注文するにはどうすればよいのかを知る。
 3. 実施時期 95・10・4～10・15 5時間扱い
 4. 単元の流れ
- I 図書室の本を購入するために、本を探すことを提案し、

〈資料 2〉

「読みたい本を探す」参考プリント

95. 10. 4. (水)

〈学習プリント記入の方法〉

「読む本を探したい」と思ったら、まず、雑誌、新聞、国語便覧、出版社の目録などを見たり、図書館に行ったりして、本を探してみよう。

本の題名	編著者	出版社	値段
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
...			

〈参考にしてもらう〉

この本を探しているときに、本の目録や雑誌、新聞、国語便覧などを見たり、図書館に行ったりして、本を探してみよう。

例) 9/15の9月号、新潮文庫100冊、003人の本目録、若狭書店出版目録、9/15の新聞広告、これから出る本10月2月号、120。

※ これからの数時間は、図書室にいろいろな本を入れたらどうなるか考える。本を送る時間になります。皆さんが「読みたい」「見てほしい」「興味がある」と思う本を探して、本の購入計画をつくりましょう。予算は5万円とします。皆さんの購入計画ができたら、同僚の先生と相談して、図書室に入れる本を送りたいと思います。

〈本を探するために参考にするもの〉

1. 雑誌 (本の雑誌、新聞、その他、いろいろな雑誌は本の紹介欄)
2. 国語便覧 (国語の参考書、作家的説明の代表者が調べられます)
3. クラスメイトによる読者レポート (ご存知のもの、見下しかあり、参考になります)
4. 出版社別、本の目録 (出版社ごとにいろいろな本が出版されているか、書水に、作家的説明の代表者が調べられます)
5. 新聞 (週に3回、読者欄、事件や学内、毎日、大抵、新聞、1000)
6. これから出る本の案内 (本館予定のリスト、新聞や雑誌に、お知らせがあります)
7. ポンダレット (本館には、いろいろな本があります。本館の中に、探したい本があります)
8. その他 (本の探りに関する案内、本館や実際に見たい本も可)

※ できるだけいろいろな本を参考にし、本を探しましょう。自分の本を見つけて下さい。

そのための資料を提示する。(1時間)

II 資料を見ながら、読んでみたいと思う本をプリントに

記入し、購入を希望する本を選ぶ。(4時間)

——選んだ本が図書室に購入される——

〈読書の記録〉

1. 〈読書の記録〉の概略

「本が好きでよく読む」生徒を対象に、毎日の読書を記録させた。自分なりの本の選び方・読み方を持っている彼女たちだが、本の世界を通り過ぎるだけでなく、この時期に読んで感じたことをことばにして確かなものにしてほしい。そこで、「記録する」ことを取り入れ、彼女たちの読書生活の幅を広げようと考えた。記録をつけている生徒から聞いて、他のクラスの生徒も数人、記録をつけるようになった。数は少ないが、このようなことが生徒たちの間で話題になり広がったのはうれしいことである。

2. ねらい

① 記録することで、自分の中に生まれた感覚を確かなものにする。

② 記録を続けることで、自分の読書傾向を知る。

3. 方法

読んだ日付・タイトルと著者名・ページ数・一言感想をプリントの指示に従って書き込む。一言感想は、書きたい、書けると思った日だけ書くことをルールとした。

3. 「本を読むこと」への生徒の意識

(1) C. H. さんの場合

この生徒は、本を一冊カバンの中に入れていたりして、読書が生活の一部になっている。彼女は、昨春秋、就職のための補習で「私と読書」というタイトルの作文を書いたが、その中に以下のような一節があった。

作者は書くことよって叫び、読者はそれよって出口の見つからない迷路の糸口をつかもうとする利害の一致の関係があるといえる。偽善でいろどられたモラリストの演説を聞くより、私は自分の持っている良い所、悪い所を赤裸々に吐き出してしまえる作家の方が好きだ。言葉にできない何かを共有できるから。読書行為を、「作家」と「言葉にできない何かを共有」することと考えている。しかし、「共有」ということばに頼ってしまい、それがどういふことなのか自覚できていないようである。以下は、「言葉にできない何かを共有できるってどういふこと？」という質問に対する彼女の返事(手紙にして渡してくれた)と、その後の会話である。(どちらも95年秋のもの)

ひとりごと。言葉にできないってどうか、今の社会って思ってること素直に言っちゃうと、かえってけーべつされたりすることってあるじゃないですか。(多分) だけど作者ってもう何もかもふっきって思ってる事書いてるから自分だけがそう思ってただけじゃないのかあとか、あんたも同じかとか喜んでしまっというか、嬉しくなっちゃうじゃないですか。ねっ! 1人だと

1人なんだけど、2人になると3になれるみたいな。昔、マンガで1+1=3っていう法則がかいてたんだけど、意味が読書の場合とピッタリ合うような気がしますケド……ハイ。

Y…1+1=3って面白い。もう少し詳しく言ってみて。

C…読むだけだったらこの人の世界のままでいいけど、読んだ後に自分がまた別の考えを持つ。それがもう一つの世界。

Y…本によって広がる世界があるっていうこと？

C…そう。広がらないときもある。

Y…「野火」はどうだった？

C…広がったと思う。

手紙では、「自分だけがそう思ってただけじゃないのかあとか、あんたも同じかとか喜んでしまう」と、書かれている内容への共感が読書の面白さであるかのように表現されている。しかし、その後の会話からは、本の内容を一方的に受け入れることを否定し（「読むだけだったら、この人の世界のままでいいけど」）、自分が積極的に関わるることによって、新しい何か（「別の考え・それがもう一つの世界」）が獲得できると自覚したことがわかる。

この後、彼女の夏の課題図書であった大岡昇平「野火」（資料3）の話になり、この本を例に「共有・もう一つの世界」について話をした。

Y…「野火」の場合は、どんなことが共有で、もう一つの世界だった？

C…「野火」の場合だったら、共有というより共感できるのが、人間最後はこうなるだろうと思うことが書かれていること。

Y…でも、現実的じゃないでしょう。

C…でも、この本の世界が作者の作った世界で、こういう世界を持つ人だと思ふ。人間ってけっこう勝手な生き物だから、その時の感情に流されて生きていくしかないんかなあ、と思った。それが、共感。

彼女にとつて「野火」は、おそらく今まで読んだことのないタイプの本である。「野火」の中から、抽象化した自分のテーマを導き、それを「共感」として位置づけている。さらに、前出の作文に見えた「作家」と「言葉にできない何かを共有」するという彼女自身の読書の公式に当てはめて、「野火」の感想を説明した。作者を想定しながら、様々な立場や考え方のあることを知り、そこに自分に関わらせることができる読み手である。

〈読みたい本を探す〉では、他の生徒と比較すると、予想通り、彼女は本の探し方も知っていた。学習プリントに挙げられた本には、様々な小説が並ぶ（資料4）。本への期待を自分の中に持つており、積極的に本へ向かおうとする「読書人」といえると思う。そして、本を読むことで、彼女の中には確かに「何か」が生まれている。この生徒の読書生活をさらに広げるには、どんな方法があるだろうか。彼女の場合、本といえば小説に偏っていること、次々に本を読み続けるばかりで「何か」をとらえるのが難しいこと

が問題ではないか。〈読書の記録〉ならば、自分の読書傾向を客観的に見ることができるとし、「何か」をことばにする学習になるのではないかと考えた。(資料5)

自分の読書を記録したことについて、彼女は次のように述べている(以下の文章は、私の質問に対して、メモで答えてくれたもの。96年度に入ってからのも)。

キロクをつけることって、まあ第1は、今日読んで感動した部分を忘れないという事。読んで感動した本って、感想を誰かに伝えたいけど、たまたまそこに誰もいなかった時に紙に全てをぶつけられるっていうか、その時はそれで終わったとして、それをまた読みかえした時にその感動が胸によみがえるってところが好きさつみたいな、ねえ?年がたつて、この紙見つけて、自分ってこの本読んでたんだと、それを見てもう一度読もうと思えばカンペキなんだよね。

彼女は、あらずじを簡単にしたり、テーマを抽象化することとは得意である。が、言葉巧みに抽象化することには危険もある。読書記録は、日々の読書の記録であり、記録を続けていくことで、彼女の言う「何か」も形としてとらえられるのではないか。

(2) Ri・O.さんの場合

国語が好きで学力もあり、ひとりで深く考えるのが好きな生徒なので、〈あなたにこの本を〉では、三浦綾子「氷

点 上下」を指定した。ところが、彼女はなかなかこの本が読めず、レポートも書けなかった。私の所に夏休み中も時々来ていたが、なかなか進まず、この課題が負担になっているのではないかと感じることもあった。レポート提出後、話をしていると、本は嫌いだと彼女は言う。

Y…なぜ、本を読まないの?

Ri…厚いのはイヤ。

Y…薄いのなら?

Ri…読める。精神的に楽。

Y…仕事だと思うのでは?本を読むことが。

Ri…そうかもしれない。

Y…どんな本なら読みたい?

Ri…時間がない。読みたいけど読めない。どんな本面白いのかわからんし、本高いし…。あらずじ読んで、面白そうなら読む。

〈読みたい本を探す〉は、この会話にある「読みたいけど読めない・どんな本が面白いのかわからない」という彼女の言葉に答を出すのではないかと考えた。ところが、学習プリントには、古典のマンガばかりが並んでいる。このことについて、彼女は次のように言う。

Y…他に面白いと思った本はなかった?

Ri…昔の話を現代にしたのが好き。歴史上の人物を、本当にあつたことを変えたりしたもの。

Y…だから、マンガで読む古典を選んだ…。

Ri…そう。マンガがわかりやすい。

本は嫌いだと言つていたのに、本に対する自分の好みは自覚しており、本への期待も持つていたことが、ここからうかがえる。言い足りないように思えたので、「続きは文章に書いて。」と言うと、後から次のような文章が届いた（彼女は、私からの問いかけに対して答えたり、文章を書いたりするのにとても時間がかかり、私が以前言つたことの返事をずっと後になつて持つてきたりする）。

私は、現在（今）を書いてある本より、昔の時代の本が好きです。なぜかと言うと、現代の話が書いてある本は、現在の出来事や平凡な恋愛を書いてある。でもそれだと少し、（恋愛などの話の展開など）分かつたりしてあまりおもしろくない。しかし、昔の時代（平安時代・戦国時代）の話なら、私の知らなかつた事件・習慣・恋愛があるし、それが本当か嘘かは私にとつては、関係がない。一番おもしろいのは、同じ人物の物語を書いても、作者（著者）によつて事物が、いい人になつたり、悪い人になつたり、かわいそうな人になつたりと話が違つてくるところがおもしろい。私は時々、昔はこうだったのかと思つたり、自分で違う物語を想像したりします。これも、おもしろいことの一つに入る。もし、分からない意味があつたりすると、辞書で調べたり、物語にでてきた人物の本当の姿などが、知りたかつたらまた資料で調べたりする。

本への期待を持つている以上に、本を読むのは彼女にとつて「おもしろいこと」であり楽しみであることがわかる。前出のC、H、さんと異なるのは、「昔の時代」に取材した物語のような、自分が「知らなかつた」ことに興味を示

している点である。知らない世界を知る面白さに魅力を感じて本に向かつている。その他、注目できるのは、「自分で違う物語を想像」する、「分らない意味」を「辞書で調べ」る、「人物の本当の姿」を「資料で調べ」るなど、本を読むことから発展させた行為である。作品を再構成したり再想像しようとしたりする試みによつて、彼女の中に生じた読みは深められているのではないか。

さらに、前出の続きで彼女は自分の読み方を説明する。

本を読んでいるうちに、作者と同じ考えや気持ちになつたりできるし、作者と自分がどんなふうに見えるかが分かる。本は1回目を読んだときと2回目を読んだときの感想・考え方が違つてくる。初めの時に読んで、話が分からなかつたのに、次に読むと少し分かつてくる。本は、人を自由にいろんな表情にしてしまう。笑つたり、泣いたり、怒つたりできる。一番いいのは、悲しい時でも本を読むことで、楽しい気持ちになつていく。本を読むことで、まわりの知らないことを知つたり、自分が知らないことを友達に教えてくれたりできる。本を読むことは、自分の中にある何かを、成長させていく教科書（資料）なのかもしれない。

前述した通り、彼女は、私の問いかけに対して答えたり文章にしたりすることに時間がかかる生徒である。彼女は、一回目、二回目と、考えながら自分のペースで本を読んで理解し、自分の中に生まれた、以前とは異なる感想を見つけているのだろう。また、口数も多くないし、おとなしい

彼女が、本を読みながら「笑ったり、泣いたり、怒ったり」、「悲しいときでも、楽しい気持ちに変わつ」たりしていることは驚きであった。本を読みながら、様々な感情を体験し、自分の気持ちと向き合っているのである。このクラスには書くことによって、次第に自分を出しはじめた生徒も多いが、彼女の場合、本を読むことの中に自分の内面を表現することが存在していたのである。

(3) A. T. さんの場合

このクラスでは、授業の中で様々な形の「書く」ことを取り入れようとしてきたが、この生徒は初め、随筆の感想・説明文への意見など、何も書かないまま提出していた。その後、星新一のショートショート（「にぎやかな未来」）を扱った際、「おもしろいと思つたところ・好きな表現を書きなさい。見づからない人は、嫌いなところでもいいから。」と指示すると、彼女は次のように書いて提出した。

きらいな所 「一日中つけっぱなしにしておいていただくことになりました。CMがうるさいからといって放送の途中でラジオのスイッチを切ると、罰せられます。」

嫌いな所として本文をそのまま抜き出しているが、ここはあり得ない未来の出来事を楽しめるはずの部分である。この部分を嫌つたのは、おそらく、この内容を現実的な出来事のように想像したのだからと考え、フィクションの世界

に遊ぶことができないのではないかと気になった。ところが、この後の詩の単元で、彼女は星野富弘の詩を気に入り、ようやく、自分のことばで鑑賞文を書いた。

このような彼女に、へあなたにこの本を」では、「窓ぎわのトットちゃん」を勧めた。わかりやすい文章であるし、何よりも、事実にもとづいた作者の子供時代を描いた作品だったからである。彼女はこの本を気に入ったらしく、熱心にレポートを書いて提出した（資料6）。以下の会話は、レポート提出後のものである。

Y…何で本を読まないの？本嫌い？

A…むずかしい本、ゴツくて…は読む気がせん。理解できん。

Y…今までで読んだ本は？

A…読むの嫌いだから…、ほとんど読んだことない。まじめに読んだのこれだけ。電車の中でも読んだ。

Y…「窓ぎわのトットちゃん」は好き？

A…うん。

Y…どんなところが？

A……校長先生って変わってる人だと思わん？障害者の男の子？がおって…他の先生が傷つくことを言つて、その先生の考え方が違う、ということを校長が言つた。校長先生が気に入った。こんな校長先生がいたらいいと思う。

Y…こういう本なら読みたい？

A…でも、読むまでわからんじやん。先生のおすすめで読んだだけじやん。

Y…また、こんな本があつたら読みたいと思う？

A…もつと早く読みたかったなつて思う。

Y…もつと早く読んだら…

A…できれば小学校の時から読みたかった。

Y…星野富弘の詩も好きよね？

A…絵がいい。あの字も好き。くじけてないところがすくなくない？

Y…実在の人物の人生に感動するのかねえ。

A…うーん。

さらに、このような会話の後、彼女は次のような手紙を渡してくれた。

あれから、自分の心の中で、なんか、先生に言わないと気がすまないの、もしよかったら、読んで下さい。

私は、普通の本は、好きではありません。私の好きな本は、障害者の生き方または、その人たちの人生です。障害者の人は、心に傷をおっている。それをどう立ち上がっていくのか、おもには、こういうことが本であれば、全部読みたいのです。別に、障害者の人たちだけでなくてもいいんです。そうですね。先生が言われたとおり「人の人生の本」が読みたいのかもしれないね（笑）それと…。私がなぜ窓ぎわのトットちゃんを好きになったのかを、くわしく書いておきます。まあ、先生のおすすめて読んだのもありますが、あの本を読んで、まあトットちゃんが主役ですよ。それで前の学校を転校させられました。それから、あの、トモ工学園に入学したんですよ。そして、入る前に、トットちゃんは校長先生に会うんです。そこで、一番私が、感動したのは、たしか校長先生は、トットちゃんの話をして4〜5時間ず——と聞いていたそうです。私は、まずそこに感

動しました。現代の校長先生達には失礼なんですけれど、この世の中にそういう校長先生は、いるんでしょうか？だから、すくこのトットちゃんがあんない校長先生に出会えたことがすくくうらやましいです。私は、この校長先生に出会いたかった。そして、トモ工学園に行きたかった。そして、何かが変わっているのかもしれない。先生は、こう思うことはありませんか？

「窓ぎわのトットちゃん」は、彼女にとつて、これなら読めると自覚でき、こんな本が好きだと説明できるものであった。それは、「電車の中でも読んだ」と言ったり、手紙で本の内容を再生できていることからもうかがえる。本によつて、心の中にあつた自分の好きなことに形が与えられ、ことばが出てきたのではないだろうか。しかし、そこから次の本へとつながつてはいない。このような彼女にも、自分の力で好きな本を探す力をつけさせたいと考え、へよみたい本を探すの単元を構想した。ところが、この学習でも、彼女は読んでみたい本を一種類しか探すことができなかつた（彼女が購入を希望したのは岩崎ちひろの絵本）。これ選んだのは、「窓ぎわのトットちゃん」の挿し絵が岩崎ちひろによるものだからであろう。今のところ、彼女は本に対してまだまだ受け身である。しかし、自分が読みたい本はどんな本なのか明らかに、「好きな本を探して読む」ことへの入り口には立つたと思う。

4. まとめ

前章までの分析を踏まえ、読書の指導で何ができるのかについて以下にまとめる。

(1) 作者を意識すること

同じ作家の作品を選んで読むことは、私たちの読書生活においてよくなされるが、生徒の中にも見ることができた。

A. T. さんが星野富弘に興味を持ったこと、また、本稿では割愛したが、M. O. さんが「アンネの日記」からアンネ・フランクに興味を持ち、それに関する様々な本を探して読んだことなどがそうである。その他、A. K. さんは、干刈あがた「アンモナイトを探しに行こう」を課題として読んだ後、彼女の他の作品について聞きに来て、紹介された「黄色い髪」を読んだ。そして、これらの本から現代の学校が抱えている問題や不登校の問題について興味を持ち、へ読みたい本を探す¹⁾では「誇りです。登校拒否」というドキュメント作品の購入を希望した。彼女の場合、作者を意識することから始まり、テーマの追求へと向かっている。作者を意識することは、その人生観や社会観などを見いだそうとすることである。ここから、一貫したテーマを追求する読みへとつなげることもできる。

(2) 自分の読みを広げること

自分の中に生じた感覚から出発し、生徒の感想は、本の内容によって身の回りのこと、社会のこと、異文化の世界のことに広がる。自分の現在の生活や考えとは異なるもの

に触れ、様々な立場があることを知る。そして、そこに自分を対峙させることで「知る」だけにとどまらず、自分の読みを育てることができると。

これまでに読んだことのない種類の本に出会い、作品が提示する問題にぶつかったC. H. さんの場合がそうである。また、M. F. さんには、へあなたにこの本を²⁾で、いわさきちひろ「ちひろ・平和への願い」を指定した(資料7)。彼女は、母親の立場から戦争を描いたフレーズを読み、その切実な気持ちを自分のものにして、この問題に向かったと思う。このような中から、社会を批評する力も獲得されていくのではないか。

(3) 自分の中の感覚に言葉を与えること

自分が好きだと思っていること、何となく感じていることが、本を読むことによって明らかにしたり、発見できたりすることがある。

好きな種類の本を自覚したA. T. さんの場合がそうである。また、へあなたにこの本を³⁾で指定した本ではなかったが、好きな本と出会いその本の話になると、Ri. O. さんは、多くの言葉が出てくる。その他、「アンモナイトを探しに行こう」を読んだA. K. さんの場合も、この本によって、心の中にあつた友人のことや不登校の問題を語る言葉が与えられたのである。

読書の単元を進めながら、また、生徒が本を読むことについて考える中で、本によって生徒のことばが出てくると

いう場面に多く出会った。このように考えると、大切なのは、何を読んだかではなく、その本から何を得たかであるように思われる。

(4) 作品を再構成・再創造すること

続きを書く・視点を交えて書き直す・手紙を書くなどは、読みの授業の中でもよく行われるが、一冊の本を読むという体験をした生徒の中にも、このような行為が見られた。

話の続きを書く Ri O. さんの場合がそうである。Ri.

O. さんは、実在の人物の実際を資料で調べたりする、と述べているが、そうすることで彼女は、自分の物語を創造している。彼女たちにとって、このようなことは作品を楽しむ方法であった。他にも、A. H. さんは、レポートで「星の王子さま」の感想を詩にした(資料8)。彼女は授業中に課された「書くこと」を、よく詩で表現する。詩を書くことが、作品を再構成するための手段なのであろう。このような行為は、自分の感想を大切にすることであり、読みを広げることにつながるのではないか。

(5) 生活の中に位置づけること

読んでみたい本を探したり、その方法を知る、自分の読書生活を記録するなど読書に関わる行動を生活の中に位置づけるという視点である。今回は、〈読みたい本を探す〉と〈読書の記録〉でこのことを目指した。ただし、今回の単元で、生徒たちは本の探し方や買い方などの方法を獲得したといえるが、それが生活の中で生きて働く力になりえ

たのかどうかはまだ明らかでない。読書への興味や関心、態度の問題であり、自分で学習することを習慣化する問題である。短い期間では検証しにくい問題ではあるが、最も重要で力をつけさせたい点だと生徒を見ていて思う。

(広島県立豊田高等学校)

《雑誌 3》

真面目日記、エッセイ

<24> <C.H.>

◆◆◆ 芳子先生の創作 ◆◆◆

◆◆◆ 芳子先生の創作 ◆◆◆

◆◆◆ 芳子先生の創作 ◆◆◆

先生の創作
先生の創作
先生の創作

◆◆◆ (雑誌代) P. 13 ◆◆◆

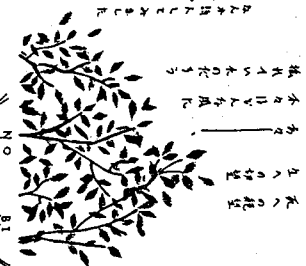
◆◆◆ (雑誌代) P. 13 ◆◆◆

◆◆◆ (雑誌代) P. 13 ◆◆◆

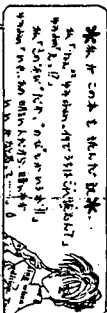
◆◆◆ (雑誌代) P. 13 ◆◆◆

A T T E N T I O N

野火



加瀬天律、野火の出来頃(昭和)



◆◆◆ KANSOU ◆◆◆

◆◆◆ KANSOU ◆◆◆

◆◆◆ KANSOU ◆◆◆



◆◆◆ KANSOU ◆◆◆

◆◆◆ KANSOU ◆◆◆

◆◆◆ KANSOU ◆◆◆

《雑誌 4》

「読者の手紙」学習刊(1)

95.10.4(9)~

2年1組(24)巻(C.H.)

本の題名	編者	出版社	値段	巻数
1 学生内、全社編	学生内	学生内出版	1,100	
2 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
3 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
4 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
5 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
6 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
7 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
8 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
9 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
10 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
11 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
12 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
13 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
14 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
15 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
16 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
17 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
18 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
19 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
20 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
21 学生内	学生内	学生内出版	1,100	
22 学生内	学生内	学生内出版	1,100	

《参考にしたもの》

- ① 学生内
- ② 学生内
- ③ 学生内
- ④ 学生内
- ⑤ 学生内
- ⑥ 学生内
- ⑦ 学生内
- ⑧ 学生内
- ⑨ 学生内
- ⑩ 学生内

読書の記録

その(1) 期間: 4/2(火)~1/6(土)

読んだ日付、頁数、感想、著者の名前、本のタイトル、著者の名前、ページ、一言感想

読んだ日付、頁数、感想、著者の名前、本のタイトル、著者の名前、ページ、一言感想

日付	本のタイトル・著者名	ページ	一言感想
4/2 (火)	THE BARRAGES OF HARBORON COUNTY	77	...
()			
4/3 (水)		118	
()			
4/4 (木)		121	
()		125	
4/5 (金)		127	
4/6 (土)			
()			
()			

日付	本のタイトル・著者名	ページ	一言感想
4/2 (火)			...
()			
4/3 (水)			
()			
4/4 (木)			
()			
4/5 (金)			
4/6 (土)			
()			
()			

資料 5

Class (1) Number ()
Name (123456789)

資料 6

1984年 4月14日 第一刷発行
A.T. 敬子
作 者
15巻
1984年 4月14日 第一刷発行
編集者 敬子
編集社 敬子社

読書人物と所愛

読書の楽しさ、大切さ、そして読書がもたらす知恵や感動について、著者は詳しく語っている。読者は、この書を通じて、読書の楽しさを再発見し、読書がもたらす知恵や感動を味わった。読書は、人生を豊かにする素晴らしい習慣である。読書を通じて、私たちは新しい世界を開き、新しい自分を発見することができる。読書は、私たちの心を豊かにし、私たちの人生をより有意義なものにする。読書は、私たちの未来を明るく照らす光である。読書を通じて、私たちはより良い人間になり、より良い社会を築くことができる。読書は、私たちの人生をより素晴らしいものにする。読書は、私たちの未来をより明るいものにする。読書は、私たちの人生をより有意義なものにする。読書は、私たちの未来をより明るいものにする。

